飲用向け乳価 4円引き上げ 4年ぶり、1キロ121円40銭 乳製品向けは据え置き ホクレン

2019年1月10日

【札幌】ホクレンは9日、大手・中堅乳業メーカーとの2019年度の生乳取引価格（乳価）の用途別原料乳について、飲用向けを1キロ当たり4円引き上げることを発表した。飲用向けの引き上げは4年ぶり。チーズやバターなどの乳製品向けは据え置く。

平均乳価（プール乳価）は1円20銭程度上がり、100円を超える見通し。飲用向けは1キロ当たり121円40銭（税抜き）となる。

ホクレンの取引先（144社）のうち、道内で取引のある大手・中堅乳業メーカー15社と合意。今後、他の乳業メーカーとの交渉を行い、正式決定する。

ホクレンによると飲用向けに関し、乳業メーカーは生産基盤の強化、生産・物流コストの増加などを踏まえ、乳価の引き上げに一定の理解を示した。

一方、乳製品向けはTPP11、日欧EPAなどを控え、国産乳製品の需要に応えるために乳業メーカーが乳製品向け生乳の増加を求め、ホクレンは道内生産者の増産支援を含めて引き上げを要求したが、据え置きとなった。

飲用、乳製品向け共にホクレン側が求めた内容には至らず、交渉は難航した。ホクレンの村上淳酪農部長は「生産現場の実情を聞くと、もう少し上げたかったが、一定の水準の値上げに至ったことには安堵（あんど）している」と述べた。

ホクレンは16年度から行っている生乳の入札を19年度も行う。19年度は前年度比2万トン増の7万トンを予定している。

◆管内酪農家「喜ばしい」 上げ幅上積み求める声も

2019年度の乳価交渉は、乳製品向けが据え置かれ、飲用向けで値上がりした。飲用向けの北海道産生乳が増える中、関係者は値上げを歓迎する一方、離農が進み生乳

が不足する中ではいっそうの値上げが必要との指摘も出ている。

生乳は主に都府県産が飲用、道産がチーズやバターなどの乳製品向けとなる。十勝酪農畜産対策協議会の坂井正喜会長（JA大樹町組合長）は、本州の生産基盤弱体化で道産の需要が高まっていることに触れ、「飲用の道産のウエートが高まる中で4円の値上げは喜ばしい」とする。

ドリームヒル（上士幌）の小椋幸男代表（67）は「生乳が足りない状況で、なぜプール乳価で1円20銭しか上がらないのか。需要に合わせてもっと上げ、酪農家の増産意欲を高めるべき。上げ幅が足りないから離農が止まらない」と指摘する。

豊頃町の鈴木健司さん（33）は「酪農業界もメーカーの増産要求に応える責任が高まる」と強調。ただ、人手確保やロボット導入にはコストを要し、規模拡大は容易でないのも実情だ。TPP11や欧州とのEPAで外国産の流入も想定され、「増産できなければ輸入を許容することになる」と懸念している。

◆2019年度の 主な用途別乳価 1kg当たり、税抜き	飲用牛乳向け	4円上げ	121円40銭
	生クリーム向け		81円50銭
	脱脂濃縮乳向け	据え置き	75円46銭
	バター・脱脂粉乳 など向け		75円46銭
	ハードチーズ向け (チェダー・ゴーダなど)		73円
	ソフトチーズ向け (カマンベールなど)		73円